

礼文島における自然歩道の現状と利用者の意識

森林・緑地管理学講座 花卉・緑地計画学分野
熊谷怜奈

(背景と目的)日本の自然公園では、自然との触れ合いやレクリエーション活動を目的とした自然歩道整備がされている。これらの自然歩道では、過剰な利用による自然環境の破壊や、利便性を高めるための必要以上の施設整備などもみられ、利用者の体験の質を下げることに懸念されている(八巻ら,2000)。そこで、環境と利用体験に配慮した歩道の整備水準の設定が有効であると考えられている(八巻ら, 2003)。

本研究では、観光や散策を目的とした自然歩道が多く存在する礼文島を対象に、自然歩道の現状評価と、観光客への意識調査を行った。そこから自然歩道の利用実態を把握し、自然歩道整備のあり方について検討することを目的とした。

(方法)礼文島は、北海道北部、稚内から西に 60km 程進んだ日本海上に位置する日本最北の島である。総面積 81.97km²のうちの約 80%が国有林、約 50%が利尻礼文サロベツ国立公園に指定されている。

2009年9月にROSの概念を用いた評価項目を使い、対象とした自然歩道の現状を評価した。また、2010年6月、7月にフェリーターミナルにおいて観光客を対象とした意識調査を実施し、自然歩道の利用状況を把握した。

(結果)自然歩道の現状については、同じコース上に様々な整備水準の区間が混在していることが明らかになり、中には保全の必要性の高い特別保護地区において荒廃の深刻な区間がみられた。観光客の多くが自然歩道を利用しており、求める利用体験が異なる利用者間では来訪形態、活動形態、望む整備に異なる傾向がみられることが明らかになった。中には異なる体験を求める利用者が混在しているコースもみられた。

(考察及び結論)同じコース上に様々な整備水準の区間や異なる体験を求める利用者が混在していることから、利用体験の質の低下を引き起こしている可能性が考えられた。また、自然環境の劣化も利用体験の質の低下に繋がることが考えられた。

礼文島の自然歩道では、自然環境や利用体験の質を考慮したコース毎の整備方針が必要であると考えられた。またそれを検討するうえで、自然歩道の現状や利用状況の把握は必要不可欠であり、今回の調査で得た基礎情報は有用であると考えられる。

引用文献

- ・ 八巻一成・広田純一・小野理・土屋俊幸・山口和男(2000):利用者の多様性を考慮した森林レクリエーション計画 -ROS(Recreation Opportunity Spectrum)- 概念の意義:日林誌, 82(3), 219-226
- ・ 八巻一成・広田純一・小野理・庄子康・土屋俊幸・山口和男(2003):山岳自然公園におけるROS概念を用いた地域区分手法:日林誌, 85(1), 55-62